

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アラビアンナイト：ファンタジーの源流を探る

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西尾, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4799

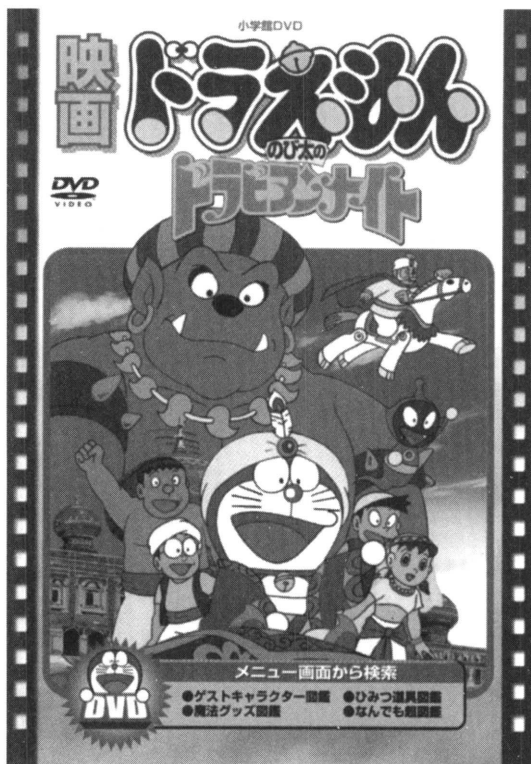
のび太のドラビアンナイト

アラジン、アリババ、シンドバッド

「のび太のドラビアンナイト」

ドラえもんシリーズに「のび太のドラビアンナイト」というものがあります。映画作品として上映されたほか、テレビでも何度か放映されていますから、ご覧になった方も多いのではないのでしょうか。絵本の中に入ってしまえるひみつ道具で遊んでいるうちに、アラビアンナイトの世界に入りこんでしまったのび太たちをめぐるお話です。

片付けをしないのび太に怒ったママが、散らかっていた絵本を焼いてしまったため、アラビアンナイトの中にいたしずかちゃんに戻ってこられなくなってしまいました。のび太がドラえもんに泣きつくと、ドラえもんはタイムマシンを呼んでくれました。アラビアンナイトにはアッバース朝の第五代カリフであるハールーン・アッラシード(在位七八六〜八〇九)という実在の人物が登場しているから、タイムマシンで当時のバグダードに行けば、どこか



映画ドラえもん「のび太のドラビアンナイト」(1991年公開)のDVDジャケット

でアラビアンナイトの世界とリンクしているはずというのです。

七九四年のバグダードに到着し、盗賊カシムに追われながらもアラビアンナイトの世界に入りこめたのび太たちは、しずかちゃんを探して砂漠をさまよううちに黄金宮殿に暮らすシンドバッド王に助けられます。シンドバッド自慢のコレクションは、世界中をまわって集めてきた魔法グッズの数々。その中には、空を飛ぶ木馬やじゅうたん、魔人がはいった瓶やランプも入っています。また、砂漠にある岩戸の前

で「開け、ゴマ」となると、異次元空間を移動することもできます。

このように、「ドラビアンナイト」の中には、アラビアンナイトと聞いて誰もが思いうかべるであろうキャラクターや小道具——アラジン、アリ

ババ、シンドバッド、魔法のランプ、空飛ぶじゅうたんなど——がつめこまれていきます。これは「ドラビアンナイト」に限ったことではありません。デイズニー映画の「アラジン」にも空飛ぶじゅうたんは登場します。アラジン、アリババ、シンドバッドの三人、そして魔法のランプや空飛ぶじゅうたん、「開けゴマ」というおまじないの文句は、アラビアンナイトとは切っても切れない関係にあるのです。

* * *

ここでアラジン、アリババ、シンドバッドの三つの物語を簡単に紹介しておきましょう。ほとんどの方が、子どものころに読んだり、劇で見たりしたことがあると思いますが、おもしろくしたり、わかりやすくするために脚色したり、ほかのお話と混ぜあわせたりした作品が多いのです。

アラジン——放蕩少年の成長物語

アラジンの物語を最初から最後まで読んだことがない人でも、魔法のランプや願いごとをかなえてくれるランプの魔人のことは知っているでしょう。アラジンはデイズニーの映画になって世界中で上映される前から、アラビアンナイトで最も有名なキャラクターでした。

デイズニー映画のアラジンはアラブ風の服を着ていますが、最初にアラジンが登場したフランス語の翻訳書には「中国の町にアラジンという少年が暮らしていた」と書いてあります。

アラジンの物語が出版された一七二二年というのは、フランスでは太陽王と呼ばれたルイ十四世の治世にあたります。このころのフランス宮廷では、中国趣味が流行していましたから、この物語をフランス語に翻訳した人が、流行にあわせてアラジンを中国人にしてみましたのでしょうか。それともアラビア語の写本に「これは中国のお話です」と書いてあったのでしょうか。実をいうと、現在のところはこれを確認するすべがないのです。というのは、アラジンの物語を記したアラビア語の原典写本がみつかっていないのです。アラジンが世に出たいきさつはかなり入り組んでいますので、後で詳しく見ていくことにしましょう。

さて、中国の町に暮らすなまけものの少年アラジンのもとに、亡き父の兄弟だという魔法使いがやってきます。しかし、アラジンの叔父を名のるこの魔法使いは縁者でもなんでもなく、アラジンだけが見つけられる魔法のランプが欲しかったのです。魔法使いは町はずれにある穴の入り口にアラジンを連れていくと、下に降りてランプをとってくるように言いつけます。ランプを見つけてもどってきたアラジンは、穴の入り口で待っていた魔法使いにランプを渡そうとしたのですが、もう少しのところまで手が届きません。誰かに見られるのではないかとあせった魔法使いは、入り口を閉じてしまいました。

穴の中でひとりぼっちになったアラジンが魔法使いからもらった指輪をこすると、指輪の精が現れ、アラジンを穴の外に出してくれました。家に帰り着いたアラジンが例のランプを磨いたところ、今度はランプの精が現れたのです。アラジンはランプの精に助けられながら

も、まじめに商売にとりくんで金を稼ぎ、礼儀作法も身につけていきました。

やがて、スルタンの姫君が湯浴みしているところをのぞき見たアラジンは、どうしても姫君と結婚したいと思うようになりました。そしてランプの精に助けられて恋敵である宰相の息子を出し抜き、姫君と結婚することができたのです。一方、もう少しというところでランプを手にいれそなつた魔法使いはランプ売りに変装すると、ランプの精がつくったアラジンの宮殿の近くを通りかかり、アラジンの妻となつた姫君から例のランプをうけとります。ランプの精を呼びだした魔法使いは、アラジンの留守中に彼の宮殿を姫君ごと自分の故郷であるアフリカに運ぶように言いつけました。

姫君もろともアラジンの宮殿が消えてしまうと、スルタンは激怒してアラジンの首を斬ろうとしたのですが、宰相にうながされて恩赦をあたえることにしました。アラジンは指輪の精を呼びだすと、アフリカまで運ばれた宮殿のそばに自分を連れていくように命じました。姫君と会つてこれまでのいきさつを知つたアラジンが姫君に毒薬をわたすと、姫君は毒薬入りのワインを魔法使いに飲ませて殺してしまいました。アラジンはランプの精に宮殿をもとの場所に運ばせると、殺された兄の仇をうとうとする魔法使いの弟もやつつけたのです。そしてスルタンが亡くなると王位をつぎ、姫君ともども幸福に暮らしたのでした。

これがアラジンのあらすじなのですが、空飛ぶ宮殿は出てきても空飛ぶじゅうたんは出てきません。空飛ぶじゅうたんは、インドもしくはイランから伝わつたとされる別の物語に登

場し、もともとのアラジンの物語には出てこないのです。また、ディズニー映画でおなじみになった邪悪な宰相も登場しません。アラジンはほかの物語とまざりあいながらよりおもしろい形へと変身し、アラビアンナイトの代名詞となってきたと言えるでしょう。

アリババ——盗賊との騙しあい

次にアリババです。アリババの物語についても、「開け、ゴマ」というおまじないの文句くらいしか覚えていないという方も多いのではないのでしょうか。

まずしい青年アリババは、山で薪を集めて暮らしていました。ある日のこと、盗賊の団がやってきたので木に登ってようすをうかがっていると、岩の前で立ちどまった盗賊の頭領が「開け、ゴマ」というおまじないを唱えて岩を開き、中に入っていきました。不思議に思ったアリババが、先ほどのおまじないを唱えて岩を開くと、そこには盗賊が奪ってきた金銀財宝が積まれていたのです。宝を手にいれたアリババは家に戻ると、金貨を量るために兄嫁から枡ますを借りました。兄嫁はこっそりと枡ますに蜜蝋みつろうをつけていたので、戻ってきた枡には金貨がくっついていました。アリババのもとに金貨があることを知った兄嫁は、アリババの兄である強欲なカシムにこれを知らせます。アリババから秘密の洞窟のことを聞き出したカシムは、しめしめとばかりに出かけていきますが、おまじないの言葉を忘れて岩の中から出られなくなり、戻ってきた盗賊たちに切り刻まれてしまいました。

帰ってこない兄を心配して洞窟に出かけたアリババは、細切れにされてしまった兄の遺骸を持ち帰ります。家に戻ったアリババは、カシムが使っていた賢い女奴隷モルジアナの知恵を借りると仕立屋に兄の遺骸をつなぎあわせてもらい、誰からもあやしまれずに葬儀をだすことができました。

一方、洞窟から死体が消えたことに気づいた盗賊たちは、洞窟の秘密を知る者を消すためにアリババの家をさがしあてると、扉に目印をつけて帰っていききました。ところがモルジアナが近所中の家の扉に同じ目印をつけてしまったので、どうにもなりません。盗賊たちはもう一度同じような計画を練りましたが、今度もモルジアナに出抜かれてしまいます。とうとう頭領が自ら出かけて家のようすをしっかりと記憶し、油商人に変装してアリババの家に戻ってきました。子分たちを油壺あぶらづぼの中にひそませ、夜になるのを待って一家を皆殺しにする計略です。ですがまたしてもモルジアナに見破られ、油壺にひそんでいた子分たちは、煮えたぎった油を注がれて死んでしまいました。

自分のすべてを失った頭領は何としてでも復讐しようと思ひ、商人をよそおってアリババの長男と近づきになりました。ついにはアリババの家を招かれて食事をふるまわれたのですが、モルジアナに正体を見抜かれてしまいます。モルジアナは剣を持って踊ると見せかけ、頭領を殺してしまいました。モルジアナの知恵に感嘆したアリババは、彼女を奴隷から解放して長男の妻としたのでした。

このように題名は「アリババと四十人の盗賊」ですが、女奴隷のモルジアナと盗賊の知恵比べが物語の主要な筋となっています。アラビアンナイトに限らず、アラブ世界の伝統文学には知恵（ときには悪知恵）を駆使して目的を果たすという説話群があり、古典文学の傑作とされているものの中には、詐欺師が主人公になっているものもあります。

シンドバッド航海記——インド洋のイスラーム商人たち

最後は、七度の航海で世界中をまわり、巨万の富を得たというシンドバッドの物語です。海を舞台にした冒険物ということもあり、シンドバッドを題材にしたアニメや映画は数えきれないほど作られてきました。子ども向けの文学全集に入っていることも多いのですが、現在、日本で流通している子ども向けシンドバッド物語は、第四と第五の航海を省いているか、話の内容を変えている場合がほとんどです。では第四と第五の航海では、何があったのでしょうか。これらの航海でシンドバッドは人を殺しているのです。詳しい内容はシンドバッドをあつかった回でお話することにしましょう。

シンドバッドは七度にわたって世界中を航海し、数々の冒険にであいます。島と違って上陸したらクジラの背中だったり、置き去りにされた島でゾウを軽々と運ぶという巨鳥ルフに遭遇したり、大蛇と宝石だらけの谷間に迷いこんだり、人肉を食らう巨人と戦ったりと、危機一髪のところを才覚と運でうまくすり抜け、大金持ちになってバグダードに豪邸をかまえ

ることができたのです。

船乗りシンドバッドという名前でも知られていますが、シンドバッドは船乗りではなく商人です。最初のうちはお金を払って外国に行く船に乗せてもらい、寄航先の港で珍しい品を買い入れてはバグダードに持ち帰って売りさばっていたのですが、だんだんと裕福になるにつれ、自分の船を持って航海するようになっていきます。

ところでシンドバッドは、全部で七回の航海をするのですが、最後の航海となる第七の航海については、新旧二種類の話が伝わっています。現在、日本語で読めるものは、アラビア語原典から翻訳された平凡社の東洋文庫版をはじめとして、その多くが新しい時代に追加されたと思われる話になっているのですが、東洋文庫版を翻訳した前嶋信次も書いているように、新しい形の第七航海はいささかまとまりのない話となっており、古い形のほうが前後一貫した筋立てとなっているようです。どうしてこのようなことになったかについては、シンドバッド航海記をとりあげた回で見ていくことにしましょう。

また、シンドバッド航海記には、中世の地理情報が満載されています。現代の東南アジアにはインドネシアやブルネイのようにイスラームのさかんな国があり、大勢のムスリム（イスラム教徒）が暮らしています。中世以後、アラブ商人たちは季節風を利用して大きな三角帆のある木造船（ダウ）をあやつりながらインド洋で活躍し、東南アジアにイスラームを伝えていきました。この「海のシルクロード」は、NHKのテレビ番組として放映されました

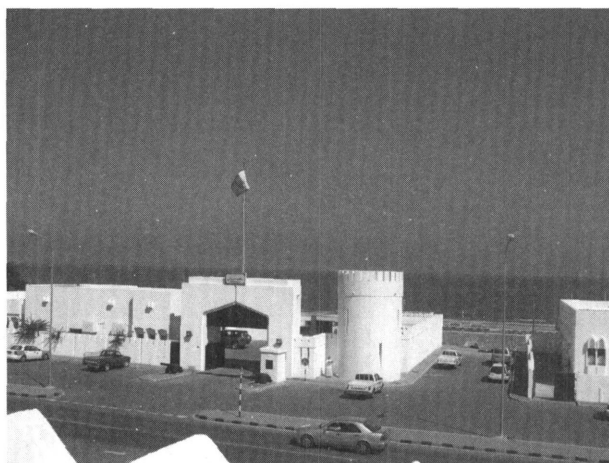
から、ご覧になった方も多いのではないでしようか。

ペルシアンナイトからアラビアンナイトへ——千年をかけた編集作業

千一夜物語という別名があらわしているように、アラビアンナイトにはさまざまなジャンルの物語が収録されています。千一夜はアラビア語では「アルフ・ライラ・ワ・ライラ」^千。九世紀ないし十世紀ころのバグダードで原型が作られたのではないかとされています。日本でいうと、

「源氏物語」が書かれた平安時代にあたります。

十世紀のバグダードで書店主をやっていたイブン・アンナデームという人が残した書籍目録には、現在のアラビアンナイトと同じような枠物語が紹介されています。つまり、才色兼備のシェヘラザードが、妻に裏切られて女性不信におちいたあげく、一夜妻をめぐっては殺してしまうようになった王に命がけで夜話を聞かせるという設定です。イブン・アンナデームは王の名までは記



オマーンのソハール港。オマーンではシンドバッドがソハール港から船出したと信じられている。(著者撮影)

していいのですが、現在、広く読まれているアラビアンナイトでは王の名はシャフリヤール、インドから中国にいたる広大な領土を持つ古代ペルシアの王朝サーサーン朝の大王であるということになっていますから、原作の設定にしたがうのなら、ペルシアンナイトになるはずです。

ではどうしてこの物語集が、アラブ世界を代表する作品となったのでしょうか。それは、アラブ世界に翻訳紹介されて新しい物語集に生まれ変わったからです。もともとはインドやイランに起源を持つ古い説話集だったと思われませんが、イスラームが興ってサーサーン朝が滅びると、ペルシアの文化が新興のアラブ世界へと入っていき、アラビアンナイトの原型も中世ペルシア語からアラビア語に翻訳されたとされています。

比較的はやい時期に作られたのではないかとされているものの中には文学的な傑作も多く、官能と幻想が渾然一体となった「バグダードの荷担ぎ屋と三人娘」や、入れ子式になった奇想天外な小話が続いていく「せむしの話」などは時代の隔たりを感じさせません。「せむしの話」は、縁起でもない死体をたらい回しにするという落語のような話ですが、実際にも新作落語（「太兵衛餅」）として桂九雀師匠の持ちネタになっています。

これらとほぼ同じところにアラビアンナイトにとり入れられたのではないかとされる作品としては、インドやイランを経由してアラブ世界に入ってきたと思われる動物寓話、ハールーン・アッラシードとその宰相ジャアファルが殺人事件に巻きこまれる「三つのリング」など

がありますが、全部を足しても千一夜には遠くおよびません。

ではどうしてアラビアンナイトには千一夜分もの物語がふくまれることになったのでしょうか。アラビアンナイトの入門書である『必携アラビアン・ナイト』の著者ロバート・アーンは、「アラビアンナイトは物語製造工場のようなものである」という意味のことを述べています。つまりアラビアンナイトは、独立した文学作品ではなく、さまざまな地域で伝えられたり創られたりした物語を長い年月をかけていろいろな人たちが編集してきたものなのです。空とぶじゆうたんに乗ったアラジンのように、新しく紡がれていくお話もあります。アラビアンナイトは、まさに果てしない物語だといえるのでしょうか。

アラジンとアリババが作られたのは、かなり後の時代ではないかとされています。シンドバッドの航海記は比較的はやい時期に作られたようですが、アラビアンナイトの中の物語として知られるようになったのは、近世以降であろうとされています。アラビアンナイトは、千年をかけて形を変え、折々の時代と場所にふさわしい新しい話をとりこんできました。以下の回では、この物語集がたどってきた千年の道のりをふりかえりながら、異なった文明をつないだアラビアンナイトの役割について考えてみましょう。まず次回では、アラビアンナイトが世界に知られるきっかけを作ったアントワーヌ・ガランとその時代、初期のアラビアンナイト翻訳書について確認します。